

未六月十二日

主水行○道申奉

伊豫行○道申奉

日光奥州水戸道中

右宿々

年寄 間屋

岩槻佐倉道

間之村々

名主 組頭

間道

〔倭名類聚抄十道路〕間道 日本紀私記云、間道、賀久禮

〔伊呂波字類抄加地儀〕間道 カクレミチ

〔書言字考節用集一乾坤〕間道、問者空也、師古云、微也、猶若反間之義、

〔吾妻鏡〕治承四年八月十七日丁酉非可期明日各早向山木可決雌雄以今度合戰可量生涯之吉凶之由被仰亦合戰之際先可放火故欲覽其煙云云士卒已競起北條殿被申云今日三島神事也群

參之輩下向之間定滿衢歟仍廻牛鍬大路者爲往反者可被咎之間可行蛭島通者歟武衛被報仰曰所思然也但爲事之草創難用閑路將又於蛭島通者騎馬之儀不可叶唯可爲大道者とせられたり

〔東海道名所記〕親亥らず子亥らずこは左の方は山にて高く右は大海なり海ばたは一騎うちの道にて打寄する浪大なり道行人さらにあとをかへりみるとまなしさてこそ親亥らず子亥らずとは名付たれ北國の道中にも此名ある所これも同じく波うちぎはなり明暦元年乙未九月に朝鮮國より使官來朝せり此ために親亥らずの道をとどめて薩埵山をひらきて海道

〔東遊記〕親不知

越中越後の堺に親不知子不知といふ所あり北陸道第一の難所としてあまねく人の亥る所也越中立山の裾北海へ張出たる所にて市振といふ驛より歌といふ所迄を山の下と稱して二里半あり立山の裾なる故に斷崖絶壁にて路徑も付がたき故に波打際を旅人通行する事なり一方は壁を立たるごとき山一方は大海なり風無く波靜なる日は旅人通行する道幅七八間或は